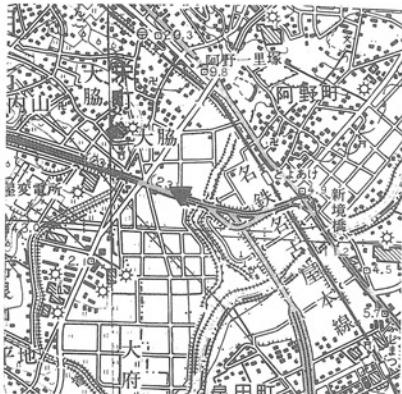


愛知・大脇城跡



(名古屋南部・豊田)

大脇城跡は、愛知県のほぼ中央部、尾張・三河国の旧国境を流れる境川の一支部である正戸川右岸の沖積地に位置する（旧尾張国知多郡大脇村）。遺構検出面の標高は二~三m前後で、周辺に小高い段丘が展開しているにもかかわらず、平坦な場所を占めているのが立地上の特色である。「桶狭間の古戦場」は、大脇城の北西二・五kmにあたる。

大脇城に関する文献史料

- 1 所在地 愛知県豊明市栄町梶田・元屋敷
- 2 調査期間 一九九六年（平8）八月～一九九七年八月
- 3 発掘機関 （財）愛知県埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 坂倉澄夫・藤井孝之・中野良法・北村和宏
- 5 遺跡の種類 居館跡
- 6 遺跡の年代 一五世紀後半～一七世紀後葉
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

は少なく、いざれも後世の編纂物に限られ、初見は『寛文村々覚書』（寛文年間／一六七〇年前後）の「（大脇村）一 古城跡 先年梶川五左衛門居城之由 今ハ畠成」という記事である。また、梶川五左衛門については、当該期の動向からみて、桶狭間の戦いの直後よりその活躍が知られる「秀盛」と考えられる。秀盛は、水野信元、佐久間信盛、織田信長、織田信雄さらには池田輝政に仕え、文禄・慶長の役において湯川（ソウル市近郊）にて戦死したという人物である。ちなみに『織田信雄分限帳』では一四八〇貫文の知行となつている。

今回の発掘調査は、伊勢湾岸道・第二東海自動車道の建設に伴う事前調査で、総計一万m²の調査対象地を七つの調査区（九六A～九六E区および九七A～九七B区）に分けて実施した。調査の結果、一五世紀後半～一七世紀後葉にかけての時期の中小の溝によって区画された屋敷地群を検出したほか、かねてから「大脇城跡」（地元の村絵図などでは「梶川五左衛門屋敷」とされていた九七B区において、大規模な方形居館跡を検出し、これまでの所伝を裏付けた。この大型の方形居館を囲む溝（堀）九七B区SDO一からは、一五世紀後半～一七世紀後葉の時期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土している。最下層（第四層）からは概ね古瀬戸後期第IV小期～大窯第三段階のものが出土し、遅くとも一六世紀中葉には居館は成立していたものと考えられる。また一七世紀代の遺物の出土は、その性格はともかく、



江戸時代にも居館が継続して利用されたことを示している。

天正四年（一五七六）銘護摩札が出土したのは、上記九七B区で検出した方形居館内を東西に分かつ南北溝SD○七（長さ一m幅三・二m深さ一・四m）の溝底面近く（第四層）からで、文字面を下に向けた状況で出土した。このSD○七の埋土中からは、第三層において瀬戸・美濃産の擂鉢片（大窯期）が、埋立土かと推察される第二層からは同じく瀬戸・美濃産の陶器（大窯第一段階および登窯第一小期～第四小期）などが出土している。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「金剛藏王 天正四年 尾州智多〔大御堂寺



奉修大峯柴燈護摩供〔武軍長久所

胎藏権現 八月廿四日 野間 常樂坊

」
510×94×8 011

ほぼ完形で、下端部にわずかな欠損がみられる。表裏面とも損傷は少ないが、長らく風雨に曝されていたためか、墨痕は殆ど消失し

ている。文字部と他との風化の違いによる凹凸により文字が判読できる。「金剛藏王」については、朱筆の可能性がある。

判読上で問題となつたのが「天正四年」の「四」である。「\」が認められたことから四の異体字の「ノ」だと判読したが、これには異論があるかも知れない。「尾州智多」「野間」「大御堂寺」「常樂坊」は、現愛知県知多郡美浜町大字野間に所在する大御堂寺（真言宗。野間大坊と呼ばれる。源義朝の墓所として著名）のことと考えられる。大御堂寺にはかつて「常樂坊」が塔頭寺院の一つとして存したことが知られている。

この他に前記九七B区SD○一から七点、九六E区SD○二から一点の墨書のある付札の断片（？）が出土した。判読を含め、詳細については現在検討中である。

9 関係文献

（財）愛知県埋蔵文化財センター『年報 平成九年度』（一九九八年）

（北村和宏）